

令和7年度千葉県立博物館文化セミナー

令和7年度 千葉学講座 要旨集

- 日時 令和8年（2026年）1月18日（日）、2月1日（日）
各日 13時30分～15時50分
- 会場 1月18日（日）：現代産業科学館サイエンスドーム
2月1日（日）：中央博物館講堂
- 1月18日（日） プログラム
13:30 開催あいさつ
13:35～ 講演1「戦国時代の恩賞と古文書」……………1
　　関宿城博物館 研究員 武田郁也
14:45～ 講演2「薬を作る、売る、利用する-近世近代の生薬事情-」・2
　　中央博物館 研究員 須田華那
15:45 終了あいさつ
- 2月1日（日） プログラム
13:30 開催あいさつ
13:35～ 講演1「水辺の昆虫」……………1
　　中央博物館 研究員 樽宗一朗
14:45～ 講演2「海鳥は豊かな海のシンボル」……………2
　　中央博物館分館 海の博物館 研究員 平田和彦
15:45 終了あいさつ
- 主催
美術館／中央博物館・大利根分館・大多喜城分館・分館海の博物館／現代
産業科学館／関宿城博物館／房総のむら（指定管理者【公財】千葉県教育
振興財団）

戦国時代の恩賞と古文書

千葉県立関宿城博物館 研究員 武田郁也

中世の武士たちが恩賞をもらうために最も重要視したのが、自身の功績の証明書でした。自身の功績を書き連ね上官の確認を得る軍忠状や総大将が功績を称賛する感状はこうした軍事文書の典型で、南北朝期以降盛んに作成されました。戦国時代は、戦いが常態化し大規模になることから、こうした戦場での文書手続きが大きく変化し、軍事文書の代表格であった軍忠状はほぼ見られなくなり、感状もまた機能を変化させていきました。

戦国時代のはじまりにあたる享徳の乱において発給された感状をみると、戦闘に参加した武士は恩賞をもらうために①功績の上申→②感状の授与→③希望する恩賞の上申→④恩賞の授与といった手続きを取っていたことが分かります。感状には恩賞を渡すことが記載されており、感状は単なる功績を称賛する文書ではなく、恩賞を受けるための証拠書類でもあったことが伺えます。

しかし時代が進むにつれてこうした機能は徐々に変化していきます。永禄9年（1566）、上杉謙信が関東の諸領主を率いて下総国臼井城（現在の佐倉市）を攻撃した際に、古河公方足利義氏は籠城した武士へ一通の感状を発給しています。そこには戦場での功績を称賛する文言とともに、官途を与える旨が記されていました。関宿城（現在の野田市）の築田氏や後北条氏も、功績を称賛するとともに領地や官途、刀を与える文書を発給しています。これらのことから、恩賞をもらう手続きが、①功績の上申→②感状・恩賞の授与へと変化したことが分かります。戦国時代には、それまで別々に行われていた功績の称賛と恩賞の給付が一体的に行われるよう手手続きが短縮され、感状は証拠書類としての機能を喪失しました。

功績の称賛と恩賞の給付を一体的に行う文書は、県内各地で見ることができます、様々な恩賞が給付されていました。このような変化がいつ起こったのかははっきりとしませんが、15世紀末～16世紀の初めにかけて、各地の武士たちがこうした文書の発給を始めたことが確認でき、このあたりが画期と考えています。

薬を作る、売る、利用する

—近世近代の生薬事情—

千葉県立中央博物館 研究員 須田華那

難解な言葉を列挙することを意味する「生薬屋（きぐすりや）の引き出しのよう」という表現があります。薬を扱う店は、多種多様な薬を整理する簞笥（たんす）を持っていました。びっしりと並んだ小さな引き出しには薬名の札が付いており、普段なじみのない言葉ばかりで確かに圧倒されます。

薬簞笥は薬を扱う店の象徴的なアイテムですが、そこに収まる薬はどのように作られ、売られ、利用されてきたのでしょうか。今回の講座では、江戸時代から明治時代にかけての生薬について、製薬や売薬、薬の利用の切り口から紹介します。

1 製薬

薬を作るには道具やレシピが必要です。製薬を担った人々はどのように原料を手に入れ、どのような道具で薬を完成させたのでしょうか。千葉県内の事例を中心に紹介します。

2 売薬

薬を売るには道具や宣伝グッズが必要です。売薬と言えば富山（越中国）が有名ですが、もちろん房総の薬も江戸時代からさかんに売買されていました。薬を売り広めるためにどのような手法が採られたのか、門前町成田（現在の成田市）をはじめとした県内の多様な事例から探ります。

3 薬の利用

病気やけがに見舞われ薬を求める人々の思いは、現代人にとっても深く共感できるものです。薬を求め、利用した人々の姿を紹介します。

なお生薬については、令和8年3月14日（土）に開幕する中央博物館企画展「生薬～自然からの恵み～」において、自然誌と歴史、双方の視点から詳しく展示します。薬簞笥も出品予定ですが、「生薬屋（きぐすりや）の引き出しのよう」ではない展示をぜひご期待ください。

水辺の昆虫

千葉県立中央博物館 研究員 樽 宗一朗

千葉県には、川、田んぼ、ため池、沼、干潟、海岸など、多様な水辺環境が広がっています。そこにはホタルやトンボ、ゲンゴロウ、アメンボなど多くの昆虫が生息し、地域の自然や文化の中で親しまれてきました。しかし近年、都市化による生息環境の減少、外来種の侵入、気候変動などの影響により、水辺の環境は急速に姿を変えつつあります。その結果、かつて県内各地で普通に見られた種が、現在ではほとんど観察されなくなった例も増えています。

本発表では、次の4点について紹介します。

1. 水辺の昆虫の基本的な特徴

タガメやゲンゴロウの水中での呼吸法、アメンボが沈まないしくみ、海に昆虫がほとんど進出しなかった理由など、水辺特有の環境に適応した多様な生態。

2. 昆虫と地域文化の結びつき

利根川流域の風土を記した『利根川図志』に登場するアカツキシロカゲロウなど、昆虫が人々の暮らしや季節感と深く結びついていた事例。

3. 水辺の昆虫が直面する環境変化と保全の取り組み

生息地の減少や分断、外来種の影響といった現状、そして千葉県が取り組むシャープゲンゴロウモドキの生息地管理、調査研究、生息域外保全などの保全活動。

4. 当館の調査研究と市民協働の実践

県内で継続して行っている昆虫調査や標本収集、市民研究員・ボランティアとの協働研究の取り組み。行徳鳥獣保護区での調査成果など、地域の自然理解に欠かせない活動についても紹介します。

水辺の昆虫の多様性とその魅力、そして房総の自然を未来へつなぐために私たちができるることを、参加者の皆さんと共に考えるきっかけとなれば幸いです。

海鳥は豊かな海のシンボル

千葉県立中央博物館分館 海の博物館 研究員 平田和彦

海鳥は、鯨類や人間と並び、海洋生態系における食物連鎖の頂点に立つ捕食者です。その食性は幅広く、イワシやトビウオなどの魚類、イカなどの頭足類、オキアミなどの甲殻類をはじめ、実に多様な海洋生物を餌として利用します。多くの海鳥がいる海には、海鳥の餌となる生物もたくさんいると考えられ、海鳥は海の豊かさの指標になると言えます。

千葉県は西に東京湾、東に太平洋が広がり、内湾と外洋という表情の異なる2つの海に囲まれています。このため、東京湾の千葉、安房や銚子の岩礁、九十九里の砂浜など、多様な海岸の環境を擁しています。また、沖合の海底地形も変化に富み、九十九里のように遠浅の海もあれば、東京海底谷や鴨川海底谷のように深い海が沿岸近くまで迫っている所もあります。多様な海の環境がある千葉県には、それぞれの環境やそこにすむ餌となる生物を好む海鳥も数多く生息しています。

また、千葉県では銚子漁港などに代表される漁業や、東京湾内の観光船など、海を舞台とした人間活動が盛んです。海鳥の中には自力で餌を捕るだけでなく、例えば漁業のおこぼれや、人間からの餌づけなどを狙うカモメ類のように、純粋な自然の環境とは異なる人間由来の餌資源や餌場を利用する海鳥もいます。

海鳥が好む餌の種類や餌場の環境は、種によって異なるほか、同じ種類の中でも繁殖地や季節、また個体ごとの個性によっても異なる場合があります。千葉県では、どのような海鳥が飛来し、何を食べているのでしょうか。千葉県立中央博物館分館海の博物館では、令和7年12月13日から令和8年5月10日まで、マリンサイエンスギャラリー「うみ鳥っぷ2 [umi-Trip 2] 一海鳥と旅する食物連鎖の世界ー」を開催しています。本講演では、「うみ鳥っぷ2」の展示内容を中心に、発表者による最新の研究成果も交えて、千葉県にどのような海鳥が生息しているのか、どこで、どんな餌を食べているのか紹介します。海鳥を取り巻く食物連鎖に着目して、千葉県の海の豊かさに迫ります。